

# 感情語刺激に伴う 表現運動の空間特性について

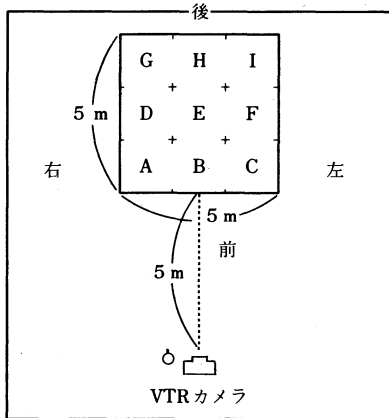
畑野裕子  
平井タカネ

## 〈研究の目的〉

舞踊創作における空間形成能力、すなわち空間の美的構成の視点から、舞踊の内的要素である感情と、外面的形式要素である空間との関連性を検討する。今回は、代表的な感情とされている「喜び」「怒り」「恐れ」「悲しみ」の4つを刺激語として与え、それらの感情語からイメージした動きをポーズならびに空間移動を含んだ動作で表現させる。そして、表現に使用された空間の広がりや位置の特性を感情語との関連から明らかにし、舞踊創作指導の手がかりとしたい。

## 〈実験方法〉

- 1) 被験者：舞踊群（モダンダンス部と体育学専攻のダンス受講生）、一般群（大学までにほとんど舞踊創作経験がない者）、各14名、計28名を、奈良女子大学生から抽出した。なお、全被験者にMAS顕在性不安検査を行い、考察の参考とした。
- 2) 空間と装置：実験空間は図1に示すように10cmのビニールテープで9領域に分割し、被験者の動きは全てVTRに録画した。



註) 列の分類  
前列 = A, B, C  
中列 = D, E, F  
後列 = G, H, I

側の分類  
右側 = A, D, G  
中側 = B, E, H  
左側 = C, F, I

図1. 実験空間と装置

- 3) 刺激語：感情の選択は、ワトソン<sup>1)</sup>やプルチック<sup>2)</sup>に基づき、強度が同じ位であり、安藤公平<sup>1)</sup>らが代表的感情としている「喜び」「怒り」「恐れ」「悲しみ」とした。なお、これらの感情語の内容については、本学2回生約200名を対象に調査した結果、「喜び」は合格、「怒り」は裏切り、「恐れ」は暗闇、「悲しみ」は死が最も多かった。そこで、これらの内容を文章表現させたものを基にして感情語として与えた。
- 4) 実験手続き：実験空間内で、実験1 = 移動運動を伴わないポーズだけによる表現、実験2 = 移動運動を含めた動作による表現、を行なわせた。

## 〈実験結果〉

ポーズの位置は、A～Iの各領域ならびに被験者からみた列（前・中・後）と側（左・中・右）によって使用実数を集計した。また、移動を含めた表現については、VTRからトレースしたフロアパターンにより、各領域・列・側への踏み込み総回数を集計し、更に使用領域数も求めた。

### 1. ポーズ表現における使用空間

ポーズ表現の領域ごとの使用総数を、喜び、怒り、恐れ、悲しみ別に、舞踊群、一般群に分けて示したものが図2である。

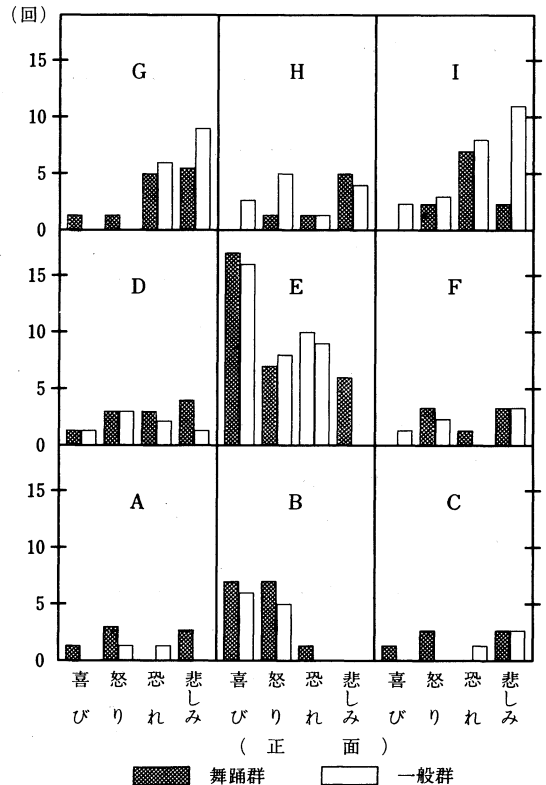


図2. ポーズ表現における領域ごとの使用総数

㊤喜びは、舞踊群、一般群ともにEとBの使用が多い。また中列や中側が多い。㊦怒りは、使用数の多い順では、舞踊群はB,E,D,Gで、一般群はE,B,Hである。更に両群ともに中列と中側の使用が最も多い。㊧恐れでは、両群ともにE,I,Gの使用が多い。列や側では、舞踊群は中列と中側、一般群は後列と中側を最も多く使用している。㊨悲しみでは、舞踊群はE,H,Dの順に使用し、一般群はI,G,Hの順である。すなわち、舞踊群が中心のEを最も多く使用しているのに対し、一般群は左後のIを最も多く使い、Eは全く使用していない。更に、舞踊群は中列が最も多いが、一般群は後列を有意に多く使っている。また、舞踊群は中側の使用が最も多いが、一般群は中側は最も少ない。

## 2. 移動を含めた表現の使用空間

1) 空間の広がり：感情ごとの使用領域数の平均を図3に示す。舞踊群と一般群の差は認められないが、喜びの表現の時に最も広く空間を使用している。

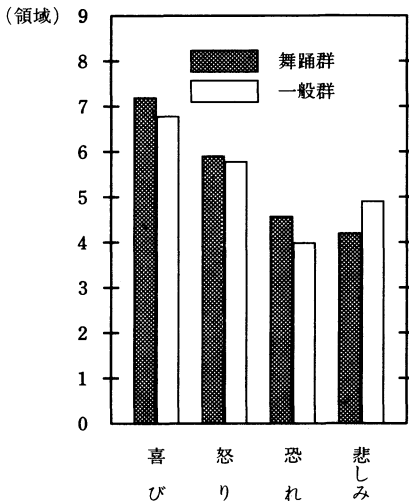


図3. 移動を含めた表現における使用領域数の平均

2) 各領域・列・側の使用：感情ごとの踏み込み総回数を示したものが図4である。分散分析の結果、舞踊群と一般群の差はないが、感情と領域の交互作用に有意差がある ( $F_{24,314}=1.757^*$ )。すなわち、㊤喜びは、Eが最も多く次にBを使用し、Iは最も少ない。更に中列と中側が最も多い。㊦怒りは、Eが有意に多く、次にDを使用し、中列と中側・右側が多い傾向がある。㊧恐れは、E,I,H,Fが多い傾向にあり、中列と中側・左側が最も多い。㊨悲しみは、E,F,H,Iの使用が多いが、舞踊群はE、一般群はIとFが最も多い。なお、両群とも後列や中側の使用が多い。以上の結果については、不安の高低による有意差や一定の傾向は認められない。

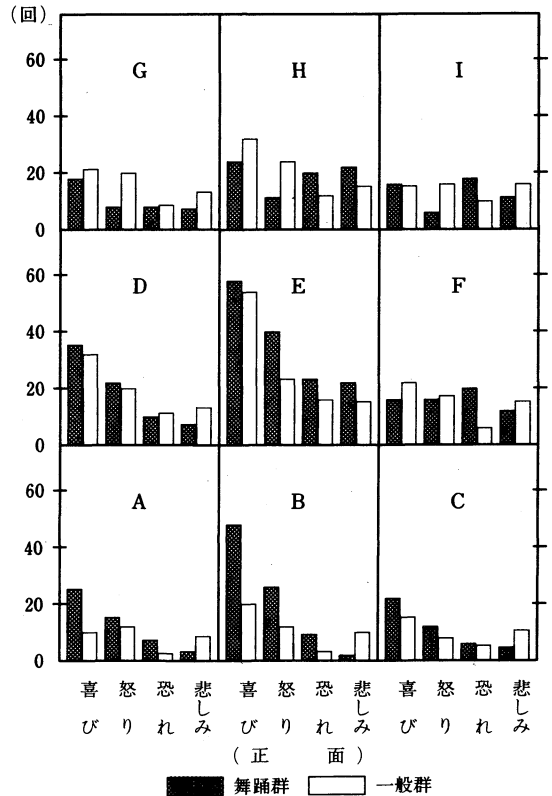


図4. 移動を含めた表現における各領域への踏み込み総回数

ポーズ表現の使用空間と、移動を含めた表現の使用空間には、両群とも高い相関があり、ポーズ表現の使用空間は、移動を含めた表現の使用空間を象徴している。

## < 考 察 >

以上の結果から、どの感情表現も、中央のEや中列・中側の使用が多い。これは、渡辺や榎らの報告と同様に、感情の特性が反映されているというより、むしろ、ポーズや動きを良く見せることへの意識が強く表われているものであろう。更に、中列や中側の使用が多いことは、Eへの通過地点となりやすいことによると考えられる。したがって、感情の特性が反映されるのは、むしろ、Eや中列や中側以外の空間であろうと考える。すなわち、㊤喜びは、舞踊創作経験の多少にかかわらず、使用空間が広く、クラゲスが「喜びは開放の衝動であり、周囲へ向かう衝動で、しかも喜びの開放に従って、諸運動は遠心的で、前方、側方、上方に同じ程度に行われる」と述べていることと一致している。また、前列中央のBが有意に多いことは、石福<sup>3)</sup>が述べる、前空間の明証性、確実性、安全性などの明るい特質を示している。喜びのもつ明い要素については、安藤も次

のように述べる。「喜びは、自己全体の充実感、満足感を中心とする感情で、人生観を明るくする。」① 怒りは、前中央Bや右側のD・Hが多く、後列や左側の使用が少ない。しかも、フロアパターンによると、前進的な移動が多い。これは、クラークスが「怒りはその攻撃準備性に応じて、諸運動は前方に生じる」と述べていることとほぼ一致する。更に、ハンフリー、D. が述べる「前方へまっすぐ進むことは、強力な印象を与える」ことを、被験者達は意識していることを示している。また、Dなどの右側空間が多く使用されていることは、石福が「横は無視や拒否の空間であり、右を表わすRightは、同時に正しいことや正義を意味するものである」と述べることと関連するものであろう。② 恐れは、Iを含む後列や左側の使用が多い。石福は左について、「Leftはもともと無価値とか、弱さを意味するもので、左は不自由で力の弱い空間であるにとどまらず、不吉で縁起の悪い良からぬことの起こりそうな気分を湛えた空間である」としている。また、コッホ、C. も「左の強調は、拒否、用心深さを示す」としており、一般に恐れは、予期しなかったことが急に起こり、それに対してうまく適応する心構えや行動を取れず、危険が身に迫って来るように感じる感情といわれる。フロアパターンが、怒りとは逆に「後退」する例が多いことから、これらの要素が、表現空間と強く関連していることを示すものである。③ 悲しみは、概して後空間による表現として特徴づけられるが、群により相違が見られる。すなわち、一般群が中央Eを全く使用していないのに対して、舞踊群は最も多くEを使用している。これは、舞踊創作経験の少ない者にとって、悲しみの表現はみせるという意識より、悲しみのもつ体験的行動様式が表われたものと思われる。「後」は、石福が述べるように、視覚的にも、運動的にも閉ざされている暗い空間であり、自分の弱点や汚点となる空間である。そして悲しみは、自分の無力さや弱さを感じることに起因する暗い感情である。このように「後」のもつ弱く暗い要素が、容易に悲しみの要素と結びついたものであろう。

以上のことをまとめると、「喜び」の「前」に対して「悲しみ」の「後」、「怒り」の「右」や「前進」に対して「恐れ」の「左」や「後退」という両極的な傾向が認められる。この両極性については、プルチックや、コッホがバウムテストで述べていることとほぼ一致するものである。しかし、女子大学生における、このような感情表現の空間特性は、リントンやボアズが述べるように、環境や学習によって得られた、一種の表現様式といえる。

今後は、このような感情表現に伴う空間使用の特性が定着する年齢的な検討をも深めたい。

〈文 献〉

- 1) 安藤公平ほか：General Psychology ころの科学，駿河台出版社，P.160～163，1969
- 2) Brown, C. : Psychology Today, 南博監訳，現代の心理学4，P.213，1977
- 3) 石福恒雄：身体現象学，金剛出版，P.103～124，1977
- 4) Koch, C. : The Tree Test, 林勝造ほか訳，バウムテスト，日本文化科学社，P.137～140，1977